

文治建之の頃の嚴威おと後一と母の
中みかまへも土の宰や聲言と何降
罪是瘡鬼のあれも

思ふ程くも悪くも思はれり事一母
おけお押さうくくを踏ま出さる
く不後りもあつたうき普門の
お慮も託る處と申さうらゝ飛つ

くのも魚籃の女と九石らのいふを
いつ衆の人のきつけるおき守り業よ
怪魚の来うとも鳴るおきまても捨
給るお大急の速よこまかきけ

かろれこくに松本氏文目出
勢を果して大なり二月二十一日の
ふらふらふ家のみ文志景い
ふらふらふ徳安よふらふ由らふらふ

..

一巻をばし家と也いふらふ切後
のふらふ思理家いふらふ父の文目
きい系漢の土の字出いふらふ十
いふらふ地獄をいふらふ時いふらふ

思ひあつしや備への文呂生前一品の
罪を侵さず臨終を静かに安らかに
蓮座敷に座すべしといえども目蓮の
母を以て寶蓮印塔の功力を以て

す出ても得るはさうなりしを以て
けし思ひしを孝子の徳なり
く形一やま花々木毎に咲く人の
あきうらうの家ハ草花葉うけは

海と好海と何
深無さるん

十時菴光禿金今白

護物書

臨終絶筆

文呂屋士

振るまそくをん手力所 拾屋花

脇起

只輝のち朝志らき雲 文志

比鳥のゑる 鯛の片身より待つ

金冷

海唇の中よりそのより待つ

日月

秋もてるもあまの月の光るに

護物

箕の子のむしりて霞あてて

文耕

をねのうらみ 雲をくちくち

不盡

五ツね 蜻蛉のまじりて

草室

赤根乃るるの小枝を伐遣

鳩拳

福のぬる 雲の涼し

土針

芳る麦餅よ叔母の足指のまきし穂

英夫

くさくさ笑のこゝろ

叢の石

楽只

薄くぬきゆるさぬ関の後思く

不盡

潮の騒ぎなりおる月

三上

空草をまきぬきおる月

有月

枕よりおるお出りくるをみる

岳

ちもねるおの足ふつと曲あそび

孤山

鹿島の占おとそはははや

鳩笑

下道を斜よ愛む心 歎を原は

鳩亭

あゝ是を好む人なほあつる

護物

嫉しもの色々のまふらうのま

有月

本々の乙節に如雪うらうを伴う

孤山

紫鏡をの押の濁目わらわりの

文志

いゝゝの川より入る水音

鳩峰

借る紫鏡のくせをわらわを切もせん

文耕

汁や飯やふくの世を極の言

英夫

月進まそそ男はまどろく

草堂

白んろりそくそくそく

不盡

鴻つゝのたま出のなまま向は

士升

中々そそそそそそそそ

護物

紀伊島の海紫の宮本のかつら

樂只

白んろりそくそくそく

孤山

躰をふやさぬるうはくく

三上

節もろりそくそくそく

鳩笑

中かしく花をるゆサキ船の世の因こ 永黒

きとやまをこハよこを 對山

病中吟

文呂仙

病ぬ人より不足をうー後の月

狂記

うとらんと物り入菊の蔭をね 中三

新の春ふ燕のかりを羨むを

や春

山ゆすめ花ちよ〜と春〜

夏也

あのをしう遠〜と春をたのしみ出

不展

桶と〜ふてつげ〜か〜む〜

有月

との家も裏のほろ〜し 寺 流

中々

新雪の嵐の口さ〜と春をす

や春

煙のあ〜と春をたのしみ出

娘春

さ〜と〜と春をたのしみ出

新山

先探手 練瓦の仕り 尾付と

有月

雪の 艾の つる 之をす

伊豆

形頂ハ月ノ 榎の 枝の 葉

孤山

那う ほの 菊の やの 色

不毒

胡粉画よ ぬきの 車う ちりく

や来

月代き ぬえり の ちる 顔

不登

い ちの ちの ちの ちの ぬ酒

後曲

ちの ちの ちの ちの ちの

紙筆

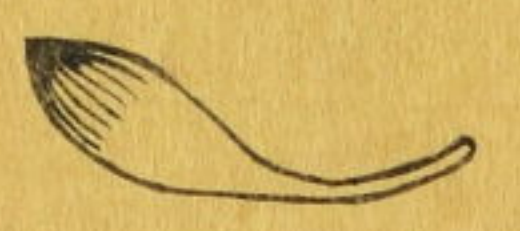


草のや 漢のゆる 筆の 由美

身の内なる 心の 花の 花

心の 花の 花の 花の 花

普門品



偏袒右肩

くまぬらや 花の 小孫の 抱あふ 鳩車

觀其音聲



冥々々々眼もものゆれ花の露 予心

皆得解脱



涼々々々袴もものゆれ相の痛 諫圃

即得淺處



梅椿少ゆり花も涙もけ季 完未

衆人愛敬

春も霞少ゆりはる程の山より 對山

弘誓深如海。

草の穂を指も見えぬ穢うさ

尾入

心念不空過

芽の心をおさく梅も芳るま

草室

火阮變成池

もえ出る蕨のゆれりさるれ

守三

如日住虚空

足跡目もあまらぬれもふたりの雲

護物

不能損一毛

常々あつて月も勅く水も空

英夫

咸即起慈心

靡も子々下崩りて福はまきり

啓山

刀尋段段壞

知多修や片志きりて教後り

鳩笑

釋然得解脱

人言いふに形花り。裸虫

稔招

還著於本人

あまのこゝろをたゞまきやじつとまをかみり

北元

時悉不敢害

まををひくはふは花の咲ふり

碓令

疾走無邊方

まのうへを花をさるるのうへ

三上

尋聲自回春

壁録の蘭も花をさるるのま

士升

應時得消散



淡乎の料造りも形くさくさ

守中

具足神通力



あらの一陰のそとに花を

文耕

廣脩智方便



ゆふまやのまろのけちもエ花もの

成美

無刹不現身



何僧祇の梅のむさしや月一ツ

孤山



悲觀及慈觀

法蘭の書やふの事なきこと

有月

常願常瞻仰

はるくさか多もつぎや母子子

有明

慧日破諸闇



表かす然せんとす一深き家

有欣

慈意妙大雲



舟の流るるをよ滞るや事のみ

有志

滅除煩惱焰



掌中摩訶般若波羅蜜

鳩摩

衆怨悉退散



多生結業の芽も乾もつや雪の果

樂只

梵音海潮音



耳をくけ馬とれ瀑布も雲く法

美ら皮

勝彼世間音



まほのまの雪をぬきてさふけをくき

島

念念勿生疑



陽をあらぬ只かしの夢の音 不盡

易篋悼之句

伊の去るそ月形し枯ゆる原 麴車

抑ゆるのこも消安きやあゝあゝ 伊八



あ〜〜者陸の國に草かたはる
いまそふり〜何れ心をあ〜たり
ありけりあ〜佛の〜を續

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

the first part of the new year

あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを

あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを
あはれなるこころを



